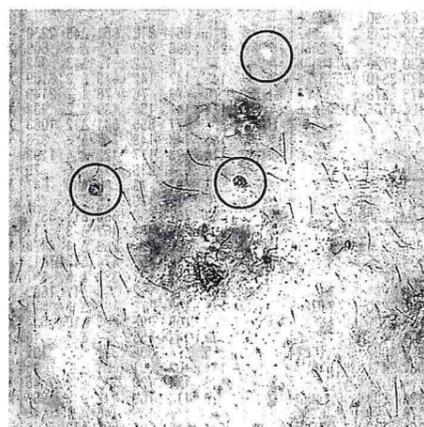


# からだ

## 赤ニキビになる前に……

### 大人の女性患者増 保険で早期治療可



早期治療の対象になる「面ぼう」  
(丸で囲まれた部分)

思春期になると、ぼつりぼつりと目立つようになると赤ニキビ。ひどくなると顔に傷あとが残り、心理的な生活の質(QOL)が著しく損なわれることもある。能になり、ニキビの慢性化を防止できるようなったと説明する。ニキビは進行程度によつて姿を変える。毛穴が詰まり皮脂がたまり、たまった皮脂を排せつさせる作用がある。「抗菌薬の治療で炎症を起して赤いニキビになり、やがて化膿(かのう)した本格的なニキビへと変化する。従来は多くの場合、炎症を起した赤いニキビの段階から抗菌薬を使って治療していた。2年ほど前から、面ぼうの段階から保険を使って治療ができるようになった。

面ぼうの治療に使われるのは「アタパレンゲル」という外用薬だ。1日1回、夜に塗布。毛穴の詰まりを取り除き、たまった皮脂を排せつさせる作用がある。最近では大人の女性でニキビが増えているという。2007年9月から1カ月間に同大など皮膚科専門医療機関34施設を受診したニキビ患者で、一番多かったのは21〜22歳の女性だった。女性全体では男性全体の5倍近くに上っていた。

20年以上の歴史をもつとされる漢方。西洋医学に東洋医学を加えた「統合医療」の可能性を探る厚生労働省のチームが発足し、あらためて注目が集まる。漢方活用に関する厚労省研究班(班長・黒岩祐治国際医療福祉大学教授)は2月、経験の蓄積から科学的証拠に基づき医療への転換を図るべきだとの提言を発表。漢方医の「匠(たくみ)の技」の正体を明らかにする試みが始まっている。

## 症状・治療法データ化

### 厚労省 チーム 効果予測・診断支援にも

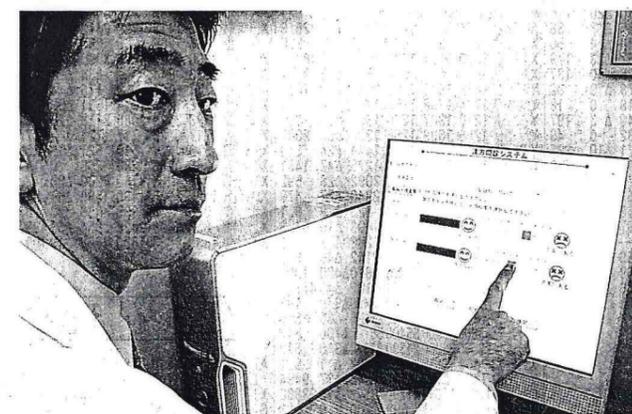
東京都新宿区の慶応大病院。渡辺賢治漢方医学センター長に促されて問診用端末に向かい合つと、モニターに質問が表示された。食や睡眠などの生活習慣に加え、冷え、しびれなどの症状を部位ごとに聞かれ、その主観的な強度を0〜100の数値で入力していく。約200の問診情報に医師が下した診断や漢方製剤の処方などを加え、個人が特定される情報を除いた千項目以上のデータを1人分として、これまでの5千人分以上のデータが蓄積されてきた。

「漢方は、患者の体質などに合わせて治療法を調整する個別化医療だ」と渡辺センター長は解説する。目の前の患者を、体質や生活環境などが似た過去の患者たちと比較しながら、見立てて治療法を選択する。こんな方法論をコンピュータで再構成するには、まず症状、診断、治療をくまなくデータ化することが求められる。

こうして集めたデータの解析を担うのは、東京大医科学研究所DNA情報解析分野の宮野悟教授、井元清哉准教授らだ。

まず取り組んだのは、初診の患者が、慶大病院式の漢方で症状が改善する確率の計算。確率が高ければ治療に入り、低ければ別の方法がないか模索するなど、治療方針決定の一助になることが期待されている。

「足の冷え」を例にとれば、120近い問診項目から、冷えと関係が深い35項目を数学的な方法で選抜。これらの項目について対象の患者と回答傾向が似た別の患者の治療記録を比較し、改善が見込めるか判断する。ここで治療効果が期



慶応大病院に設置された漢方問診システムを操作する渡辺賢治漢方医学センター長＝東京都新宿区

待できるとされた人の91%が、実際に3カ月後の症状改善がみられたという。

問診データから診断をつける試みも行った。漢方医学では体質や症状を総合して「証」という診断をつけるが、線が細い「虚証」と体格のいい「実証」を計算で判別すると、実際に医師がつけた判断と87%一致。医師の診断支援につながるかもしれない。

井元清教授は「漢方医学が数式に乗せられることが証明できた」と手応えを語っている。

慶大病院単独で行っていたこの研究は本年度から、全国10施設に拡大する。より多くのデータを集めれば予測の精度アップが見込めるためだ。

患者によるシステム活用も視野に入れていく。渡辺センター長は「患者の医療情報を患者に還元したい。現在も自分自身の治療経過を来院時に確認することはできるが、将来的には携帯端末から自分に合った治療を探せるような仕組みにしていければ」と話している。

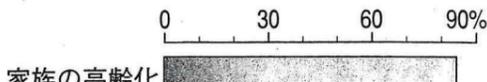
### 広がる将来への不安 精神障害者の家族調査

#### 安心できる支援

精神障害者の家族の多くが高齢化や自身の病気が将来に対する不安を多忙を抱え、困ったときに相談できる場がないと感じて、不安を解消する専門家の支援が必要だ。調査は厚生労働省の補助事業で、精神障害者の家族が加入する全国の家族会の会員約4500人が回答した。

調査によると、精神障害を持つ本人は平均年齢42歳、83%が統合失調症、そのほかはうつ病など。家族の80%が本人と同居していた。

本人の病状に気付いたときの本人の年齢は22歳で、31%が専門家に相談できるようになるまでに3年以上かかった。現在信頼して相談できる専門家がいないと答えた家族



## 知ってましますか? 認知症

杉山 孝博

多くの認知症の人は、家族が一生懸命お世話しても、お世話すればするほど認知症の症状をひどく出すものだ。家族は、楽しんでいるわたくしから、まじめで熱心であるあまじり、精神的にも身体的にも消耗しきってしまつた。こんなとき、誰かが別の見方、考え方を教えてあげて、家族が上手に割り切れるようになる。すると、介護はずっと楽になる。

「冬でも裸に近い状態で一晩中動きまわっていて、何回着せてあげてもすぐ脱いでしまいます。夏は夏で、午後3時ごろになると両戸を閉めてしまい、厚着をしています。汗をかいて暑そうなので着物を脱ぐように言っても、聞き入れてくれません。風邪をひいたりするのが心配です」

「お風呂に入るのを嫌がって困ります。主人に

## 常識押し付け



「お風呂に入るのを嫌がって困ります。主人に